西周「非学者職分論」のディスクール批評

渡　部　　望

1.「学者職分論論争」
2.「非学者職分論」の論点
3. 福沢の「論理」批判
4. 福沢における「参照不可能性」
5. 福沢における「物語的論理」
6. 結論にかえて：啓蒙とことば

ここでは「学者職分論論争」における西周の応答、「非学者職分論」[1] における「ディスクール批評」を検討することによって、西周の啓蒙の一側面に光を当ててみたい。

1.「学者職分論論争」

まず簡単に「学者職分論論争」の経緯を振り返っておこう。明治六年七月に駐米代理公使の任から帰国した森有礼は西村茂樹を通じて「都下の名家」に結集を呼びかける。そして九月一日に学術結社としての「明六社」の最初の会合を開く。明六社は以降月二回の会合を重ね、翌明治七年四月には雑誌『明六雑誌』を刊行する。これによって明六社の活動は世に広く知られることになる。

明治七年四月二日に『明六雑誌』第一号と第四号が発行される。続いて四月八日には問題となる『明六雑誌』第二号が発行される。この第二号は、その年の一月に福沢諭吉が『学問のすゝめ』第四編として刊行した「学者の職分を論ず」に対する反論の特集号となった。加藤弘之「福沢先生の論に答う」、森有礼「学者職分論の評」、津田真道「学者職分論の評」、西周「非学者職分論」の四本の論文が掲載されている。この応答がいわゆる「学者職分論論争」である。

「学者職分論論争」に関する先行研究を概観すると、当然のことながら福沢諭吉の視点に立つ研究が圧倒的に多い。福沢諭吉を主語として語る研究の多くには、濃淡の差はあれある共通のトーンが確認できる。そのトーンを、少々滑稽なまでに誇張した表現を、我々は現在もっとも流通している文庫版『学問のすゝめ』の「解説」に見ることができる。

封建社会の余弊は、明治になっても、依然、著しい官尊民卑の気風となって残った。

蓋し明治維新は、ヨーロッパに見るような市民革命ではなく、士族によって実現されたものだからである。役人の威張ることは、明治の以前も以後も少しも変わらない。官尊民卑の打破は、福沢の生涯の念願で、彼が政府の再三の召命にも応ぜず、民間の学者をもって終始したのは、自らその範を示したものである。「政府の力だけが強く、役人だけが威張る国は、決して文明国とは言えない。国民はよろしく官民対等の精神を自覚すべし」とは、初編・第二編・第三編そのほかにも力説されたところであるが、なかんずく第四編「学者の職分を論ず」・第五編「明治七年一月一日の詞」は、全編このことを論じ、官僚学者の事大主義を批判して、時弊を突いた快文字であろう。政府を恐れず、政府に媚びず、政府に頼らぬ逞しい市民社会を築くことこそ、彼の抱負であった。

権力に弱い日本の学者の卑屈な伝統は、『文明論之概略』などにも痛論されているが、「政治（政治家）と学問（学者）とは各自の分野に独立して、車の両輪のごとく、その権威に少しの軽重もあるべきではない」というのが彼の持論であり、それは生涯の行動にも遺憾なく発揮された。彼が学問（学者）の権威を高めるために払った不断の努力は、実に先覚者たるに恥じぬものがあった。[2]

福沢諭吉の思想的展開を記述するために「学者職分論論争」を参照する論者の多くは、論争を対話としてではなく、福沢のモノローグとして理解する傾向を持つ。上の引用はその典型であり、福沢の主張を極端に単純化し、「官対民」=「権力対市民」=「従属対独立」=「官僚学者対私立学者」=「明六社同人対福沢諭吉」といった素朴な二分法的図式で論争を要約する。だがそうした紋切り型でこの論争を説明することは、論争というダイアローグの可能性をあらかじめ閉じてしまうものではなかろうか。

「学者職分論論争」の「論争」に注目した研究は限られている。小林嘉宏の論文「明六社における学術論争の意味――「学者職分論争」を手がかりとして」[3] はその数少ないひとつである。著者の言葉を借用すれば、この論文は「個々の論者の主張自体よりも「論争」の構造を考察すること」を課題とし、「「論争」の過程に浮かび上がってくる論者達相互の思考形態や発想様式のコントラストに分析を定める」ものである。小林は西の「非学者職分論」を二つの観点から分析し、その結果を次のようにまとめている。

1．個別の専門的学問領域にとらわれることのない福沢独自の文明論的発想によって書かれた「学者職分論」に、西は「致知学」という個別の専門的学問による視野から批判した。

2．福沢は学者自らが標的を示す実践者となって、人民の積極的な活動性を喚起する中心的推進者になることを主張したが、西は「事勢の勢」を「客観的」に判断する批評家となることが重要だと主張した。

そして次のように結論する。

西は福沢の主張を一応了解していたとしても、西が実践的問題については禁欲的態度をとり、自らの視点を哲学、論理学という「専門」的な学問分野に限定することによって、福沢の論に対応する論を立てたことに変わりないことは改めていうまでもなかろう。このような西の「非学者職分論」にしめされた態度は、結局福沢との間に生産的な論争を成り立たせたというより、むしろ、二人の間の基本的立脚点の相違ばかりを際立たせる結果をもたらすことになったというべきだろう。[4]

我々はこの結論に対して疑問をもつ。はたして西は実践問題について禁欲的だろうか。むしろ西は「明六社」という学術的公共空間を足がかりにして、啓蒙活動の実践に踏み出したのではなかったか。論理学は狭い「専門」的学問分野だろうか。確かに今日の我々にとって論理学とはそういうものであるかもしれない。しかし問題は明治初年の日本における論理学がどのようなものと見なされていたかという点にある。そして西は論理学を学術の基礎、ヨーロッパ文明の本質、さらにはコミュニケーション社会の基盤と考えていたのではなかったか。福沢と西は論争のなかで両者の相違ばかりを際立たせていただろうか。逆に西は福沢の現状認識に対してはほぼ全面的に、その主張に対してはその大半に同意を表明してはいないだろうか。同じ洋学者として多くの共通点を確認した上で相違点を浮き彫りにし、さらなる論争＝対話への可能性を開いているのではなかろうか。どうやら西の「非学者職分論」には、さらには「学者職分論論争」にも、新たな視点で読み直す余地は残されているようである。

2.「非学者職分論」の論点

「非学者職分論」の論点を概観しておこう。西は福沢の「学者職分論」にたいする批判を六項目挙げる。その六つの批判点は以下のように要約できる。

第一、独立の危機という根拠薄弱な前提から出発するのは「詭論」である。
第二、無気無力の愚民を短期間で開明できると主張するのは「早計」である。
第三、学術・商売・法律が「未だ」外国に及ばないことを憤るのは「徒為」である。
第四、洋学書生が官を選ぶ真の理由を見逃している。
第五、政府への阿諛追従を洋学者に帰すのは「冤」罪である。
第六、政府（生力）と人民（刺衝）の均衡は「世の勢」に左右される。
結論、学者が政府で働くことも私立することも可であり、個人次第である。

この六項目を内容別に分類整理すると、次のようになるだろう。
第一、福沢の文章の論理的非整合性の指摘。
第二・三、福沢の主張の「非現実性」の指摘。

第四・五・六、福沢の「状況認識」批判。
結論、福沢の「職分論」批判。

福沢に対する西周の応答は、他の三人の明六社同人のそれらとは異質なものである。なにしろ西は福沢の主張、「洋学者は官を離れ私立すべし」に対してほとんど反論らしい反論をしていない。それどころか結末では、福沢の「高風を欽慕」し「早晩まさに驥尾に附かんとす」と福沢に倣って政府を離れ、私立独立したいという願望さえ告白している。ところがさらに不思議なことに、その告白の直前で、福沢の「職分」思想を断固として否定しているのである。こうしたことから我々は西の福沢、あるいは福沢の主張に対する微妙な距離感を感じることができる。

また「非学者職分論」の論じ方もユニークである。西は福沢の土俵に立つことを拒否している。福沢に正面から反論しない。そうではなく、福沢の論理の破綻を指摘し、論拠の曖昧性を突く。いわば表面的な指摘に終始する。我々はこのひたすら表面と表現に注目した応答を、福沢のディスクール批評だと考えている。ディスクール批評とは言語表現に注目することで、表現を成立させている思考、さらには無意識的・時代的イデオロギーをあぶり出そうとする批評である。とはいえ西周をミシェル・フーコーの先駆者だと言うわけではない。西の「文章」と「論理」に対する強い関心が、ディスクール批評へと導いたと考えるべきであろう。というのも西は文明開化においては、新しい思考方法、哲学と並んで、新しい文章表現が必要だと考えていたからである。西は『明六雑誌』第一号の巻頭を飾る論文、「洋字を以て国語を書するの論」のなかで明六社を「学・術・文章の社」と捉え、「学なり術なり文章なりは、皆かの愚暗を破り、一大艱険を除くの具」[5] であると述べている。つまり西にとって「学問」と「技術」と「文章」の近代化は、日本近代化のために最初に着手しなければならない事項であった。そして文章表現への強い関心がこの論争のなかに現れたと考えるべきではなかろうか。

「非学者職分論」の重要な論点は、福沢のディスクールを取り上げた第一の論点と、「職分」思想に焦点を当てた「結論」に集中している。ただ「結論」部分の短すぎる記述の背景に横たわる問題領域はとてつもなく広い。そこには西周と福沢諭吉の「知識人観」、「職業観」が関わっているだけではなく、二人の経歴、つまりそれぞれの幕末期の官僚洋学者としての活動、そしてその明治期との連続性と不連続性、などといった、社会学的な問題を取り上げざるを得ない。残念ながら「結論」に関わる問題については別の機会に譲ることにして、ここでは第一の論点に限定して論じていきたい。

３．福沢の「論理」批判

「非学者職分論」冒頭で西は福沢の推論の論理的欠陥を指摘する。まずはその内容を検討しておこう。

第一、立論の本意、本邦の独立疑うべく危むべきものあるを起本とし、結末、学者私立してこれを維持すべきをもってす。それいわゆる疑うべき危むべきものは、概括の意想より取る。下文論ずるところ気風のごときこれなり。ゆえに一つも事実に本きたるものにあらず。しからばすなわち、独立の上に一点の疑なき能わずと云うものは、きわめて疑似の間に根拠するものにして、この疑似なるものをもって学者をして私立を謀るために概して官を辞せしめんと欲するは、蒸気を化して固堅質となすがごとし。一理なきにはあらずといえども、致知学において詭論には属すべからずや。(76－77)

福沢は日本の独立が危機にさらされているという「事実」を「学者職分論」の出発点とするのだが、西はその出発点そのものが確かな事実であるということが実証されていないと言う。「独立の危機」は「一つも事実に本きたるもの」ではない。「概括の意想」つまり根拠の曖昧な思いつきにすぎない。したがって、福沢の論は、曖昧な前提に基づく「詭論」だと西は断定する。

この西の指摘の妥当性を検討してみよう。「学者職分論」は「独立を失うの患はなかるべしや」(84) という疑問をその出発点として提出する。しかしその疑問を提出するのは、福沢自身ではなく、特定不能な他者である。ひとりは「識者」、もうひとりは「疑う者」、三人目は「この国を蔑視したる外国人」である。福沢はそうした匿名の人々の言葉を紹介し、「事に疑いあらざれば、問のよりて起るべき理なし」と結論する。独立に疑問を持つ人がいるということは、独立に疑問があるからだと結論するのである。このような擬似的推論に対しては、我々も西周と声をそろえて「一理なきにはあらずといえども、致知学において詭論には属すべからずや」と言うべきではなかろうか。

もう少し丁寧に見てみるとそこには二つの問題が併存している。一つは「独立への疑問」を口にする人が誰なのかという「参照関係」の問題である。二つ目は、「疑問がある以上、問題が事実としてある」という推論の妥当性の問題である。つまりこういうことである。読者が「独立の危機」という福沢の論述を検証しようとすると、まず「匿名性」による参照関係の不可能性が立ちはだかる。そしてさらに「論理の飛躍」が待ち受けているわけである。

これとよく似たケースを我々はよく知っている。今日の大学生が福沢諭吉と同レベルの推論を用いて論文を書く場合である。インターネット上の複数のサイトに「日本の独立が怪しい」と書かれていた（匿名性)。そういう書き込みがある以上、日本の独立は怪しいと言わなければならない（論理の飛躍)。などといった記述を学生の論文のなかに発見したら、教師たる我々は「根拠が薄弱である」「論拠を明らかにすべし」などと朱筆したくなるであろう。

「学者職分論」の導入部分に対する西の批判は妥当なものである。だが、そうした批判は論争にありがちな「論争相手の言葉尻を捉えて先制攻撃を加える」類の姑息な論争戦術

にすぎないかもしれない。言い換えれば、小林が言うように、「論理学」という閉じられた学問分野からの限定的攻撃、タコ壺からの安全な狙撃かもしれない。我々はそう思わない。西の指摘は福沢諭吉に加えられた最初のディスクール批評であり、その射程は福沢諭吉の文体、思考方法から啓蒙の姿勢にまで及ぶものである。そしてわれわれは西の批評の先駆性を特記しなければならないと考えている。というのも近年のいくつかの福沢研究が西の指摘を繰り返しているからである。従来福沢諭吉の文章については、「解りやすくて論理的」だという評価が定着していた。そうした通念に対して疑問を投げかける見解が表明されてきているのである。例えば松沢弘陽は『文明論之概略』を丹念に分析した論文の導入部で次のように述べている。

> この本（『文明論之概略』引用者注）の読解自体決して容易ではない。行論の配線は周到に張り廻らされ回路が巧みに完成しているかと思うと意外なところで途切れている。意図的か否か簡単に述べられたことばが、その背景にどのような事実を持っているのか、その事実はどれだけの意味を持っているのかもはっきりしない。次第に進んで来た、西洋の著作の福沢への〈影響〉を跡づける作業、とくに手沢本の点検についても同様のことがいえる。また、本書草稿の検討も漸く緒につき、執筆を中断しては西洋の書物を読み、読んではまた書いたという加筆塗抹縦横の苦心のさまに接することが可能になったが、数次にわたる草稿から成稿にかけての変化が何を意味するか読み取ることはきわめて難しい。[6]

松沢が「行論の配線は周到に張り廻らされ回路が巧みに完成しているかと思うと意外なところで途切れている」と言うとき、それは上で見た「推論の飛躍」を指していると思われる。また「意図的か否か簡単に述べられたことばが、その背景にどのような事実を持っているのかもはっきりしない」という指摘は、「参照関係の不可能性」に該当するであろう。いわば松沢は「非学者職分論」の西周と同じ感想を繰り返しているのである。

またさらに二人の研究者がこの福沢の文章における「参照関係の不可能性」と「論理の飛躍」を指摘している。次はその二つの研究を見てみよう。

４．福沢における「参照不可能性」

歴史家坂野潤治は福沢における「参照関係」の問題について次のように指摘している。

> 我々は、丸山氏の指摘する、「福沢諭吉の政治論が高度に状況的思考に基いている」（昭和二十七年刊『福沢諭吉選集』第四巻解題）という点を、もう一度吟味しなおしてみる必要があろう。「状況的思考」を特徴とする思想家の論述の真意は、その論述がなされた状況との関連で初めて明らかになることはこれまでもたびたび指摘されて

きた。しかし福沢の場合に厄介なのは、福沢が同時代人としてもっていたであろう状況認識と同程度の状況認識を今日の我々がもちうるほどには、日本近代史研究が進歩していないという点である。福沢が同時代的にもっていた情報と認識とは、近代文明論、国家・政体論にとどまらず、現実の政治・経済・外交についてのトップ＝クラスのそれであった。福沢の状況的発言とはいわばこの総体から出てきたものなのである。いいかえれば、福沢の状況的発言はその当時において福沢が認識した総体的な状況構造にもとづいているのであって、我々がそれと同程度の総体的な状況構造の認識をもちえない限り、彼の誇張的表現に振りまわされてかれの絶えざる転向を論じさせられるはめにおちいるのである。[7]

坂野は福沢の論述の背景にどのような状況認識があるのかが把握しづらいと言う。「状況認識」とは「情報」と「認識」から構成される「総体的な構造」である。したがって坂野は福沢がどのような「事実」をどのような経路・視点から「知り」、それに対してどのような「認識」を行ったのかがわかりにくいと言っているわけである。つまるところこれは「論述」と「歴史的事実」の「参照関係」の問題である。坂野は福沢の参照関係の「わかりにくさ」の原因を「日本近代史研究が進歩していない」点に帰している。たしかにそういう一面はあるだろう。しかし問題はそればかりではないのではないか。というのも「非学者職分論」の西周は、明治七年における「日本独立の危機」がどのような歴史的事実と参照関係にあるのかが理解できなかったからである。福沢の言う危機がどれほど切迫したものか、福沢の同時代人であり福沢と同程度の情報を有していたと想定できる西周も理解できなかったのである。そもそも「日本独立の危機」が、ある程度社会的に共有されていた通念であったならば、西が「学者職分論」の導入部に疑義を持つことはなかっただろう。したがって福沢の「発言」と「状況認識」の関係、さらに「状況認識」と「状況」との間に横たわる不可能性は、歴史的懸隔に由来するものではないのではなかろうか。それは福沢諭吉の側に原因があると考えるべきではないだろうか。つまり、それは福沢諭吉の文章表現のひとつの特徴なのではなかろうか。

ところで今日の研究者は、福沢が「学者職分論」のなかで訴える「独立の危機」を「内地旅行論」問題と関連づけて考えている。日本が諸外国と結んだいわゆる「不平等条約」には、唯一日本に「有利」な「逆不平等条約」があった。それは日本における外国人の居住を制限し旅行を禁止する条項であった。それによると外国人は開港場の周囲十里（約40キロメートル）以内の遊歩しか認められていなかった。いわば明治日本に住む外国人は江戸時代の出島状態と本質的には変わらない条件にあったのである。これは外国人にとって、とりわけ商業活動にとって不都合な規定であった。そこで明治六年二月、イタリアは日本政府に対して日本の裁判管轄権を認めるかわりに、イタリア人の内地旅行の自由を認める提案をおこなう。これによって政府内、言論界において「内地旅行」を認めるべきかどう

かという議論が繰り広げられることになるのである。

『明六雑誌』第23号では西周が「内地旅行」を発表し、第26号では福沢諭吉が「内地旅行西先制の説を駁す」を発表し、二人はここでも論争を行うことになる。福沢はその論文の中で次のような主張を展開する。内地旅行は必然的に日本と西洋との経済戦争を招く。日本の愚民は狡猾な西洋人に太刀打ちできないから、日本は経済的に敗北し、独立が危うくなる。したがって外国人の内地旅行は認めるべきではない。さて、この主張を「学者職分論」に組み込めば「独立の危機」の論証は確かなものになっていたはずである。「内地旅行」と「人民が愚民である」という二つの条件があれば、日本の「経済的独立が危機にさらされる」という論理は確かな道筋で結ばれるからである。だがはたして福沢がそう考えていたのかという疑念は残る。「内地旅行」論はあくまで状況証拠でしかない。それになぜ福沢は「学者職分論」のなかでそのような書き方をしなかったのだろうかという疑問も残る。

とりあえず「独立の危機」の疑問は「内地旅行論」と組み合わせることによって解消されたとしよう。だが「学者職分論」にはそれ以外にも参照関係が不明な論述は残っている。たとえば「一時の術策」はそのひとつだ。福沢は政府が愚民を御するに「一時の術策を用い」るべきだという主張があることを紹介し、それを「言うべくして行うべからず」(87)と批判する。「一時の術策」に対する批判は「学者職分論」の重要な一部分を構成している。したがって我々は、ではそれは誰が主張したのか。その「一時の術策」とは具体的にはどのようなものかを知りたい。しかしここでも「参照不可能性」が立ちはだかっていて、妥当な回答は未だに提出されていないのである[8]。やはり「参照不可能性」は福沢の文章の内在的な特徴なのではなかろうか。

５．福沢における「物語的論理」

続いて福沢のディスクールの論理の検討に移ろう。コミュニケーション論の立場から福沢の文体とレトリックを研究している平井一弘は次のように述べている。

> 福沢の文体については既に多くのことが論じられている。当時の知識人に一般的であった漢文体の書き言葉から、福沢のいう、解りやすさを第一の目的とする「雅俗めちゃめちゃ」文体に至る福沢の文体改革の努力は「福沢全集緒言」にかなり事細かに説明されており、また『文字之教』にその実践例が記されている。さらに、後の多くの研究者が福沢の文体を論じている。これらの研究者の多くは、福沢文体をそれ以前の漢文調文体と対比して、「平易である」「解りやすい」「民主的」などの評価をしている。国語・国字問題を専門とする一部の国語学者がいうように「民主的」であるかどうかはよく解らないが、福沢の文体が、当時の知識人のそれに比べて、平易であり、解りやすいことは間違いはない。その意味で福沢の文体はコミュニケーション上の大きな効果をもたらしたことは疑い得ない。それだからこそ、『西洋事情』『学問のすゝ

め』『文明論之概略』などは当時のベストセラーになったことは疑い得ないであろう。私自身このことについては別稿で論じているし、今後も研究を進めなければならないと考えている。

福沢の文体を、個々の言葉遣い、あるいは言い回しの範囲を超えて、一つのディスコースのレベルで読んでも、「普通に」読んでいると、そこには「解り易さ」を超えたある種の「心地好さ」あるいは「いさぎよさ」を感ずる。例えば、『学問のすゝめ』の各章であり、また、『福翁自伝』全体である。私は、この感じは福沢のディスコースが、基本的には物語であって論証ではないことから生ずるのではないかと考えている。そこには論証特有の、効果を計算した証拠の積み重ね（レトリック用語では、構想と配置）ではなく、尻取り遊びの単語や、俳諧の連句をディスコースとして展開するような物語性がある。

しかし、福沢の文章を分析的に読もうとすると、突然、この「心地好さ」「いさぎよさ」が断ち切られる場合がある。そこには「解りにくさ」が顔を出す。例えば、有名な『学問のすゝめ』初編の冒頭の「万人は万人、皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別なく、万物の霊たる身と心との働きを以って、天地の間にあるよろづの物を資り（中略）自由自在、互いに人の妨をなさずして、各々安楽に此世を渡らしめ云々」において、平易な文体で書かれ、解り易いようではあるが、「万人平等」と「万物の霊」と「自由自在」はどのように関係するのかを問い始めると、この関係は解りにくい。さらに、『文明論之概略』の第一章の「議論の本位」も平易な言葉で説明されてはいるが、本書でも様々な角度より論じているごとく、これが何を意味するのかは解り難い。[9]

平井は福沢の文章のもつ魅力をうまく捉えている。それは平易で解りやすい。しかも読者を惹きつけ、読みの快楽を与える「文学的」な力すら持っている。平井が「心地好さ」というとき、それは福沢の文章のリズムを、「いさぎよさ」と言うとき、それは想像力を通じての読者と著者の人格的交流可能性を暗示しているように思われる。それはつまりある種の「文学性」である。平井はこうした福沢の文章の魅力が、それが論理的な構造物であるよりも、物語的な構造を持っていることに由来するものだと分析する。福沢のディスクールは「西洋的な」論証の論理とレトリックで構成されているのではない。むしろ日本古来の「語り」（「尻取り遊び」）や古典的文芸（「俳諧の連句」）に内在する遊戯的な連鎖、あるいは「流れ」によって構成されているのだと言う。我々はさらに「リズム」（口調）を付け加えたいと考えるのだが、ともあれ福沢的ディスクールの基軸は「日本的レトリック」なのであり、そのことが、逆に、「西洋的」論理の糸をたどりながら理解しようとする読者を、突如として「解りにくさ」に直面させる原因だとするのである。この平井の指摘は非常に興味深い。

「学者職分論」の冒頭の「問題を口にする人がいる以上、その問題が事実としてある」という推論も、論理的な推論というよりは、「火のない所に煙は立たぬ」ということわざ、つまりは伝統的言語文化に基づく推論だと考えることができるかも知れない。さらに先に引用した松沢の感想（「行論の配線は周到に張り廻らされ回路が巧みに完成しているかと思うと意外なところで途切れている」）を説明することができるかもしれない。あるいは西が「非学者職分論」の冒頭に置いた、「本論立位明快、しかりといえども間然するなきこと能わず」という文の根拠を説明するものかもしれない。

「非学者職分論」の他の箇所に目を移せば、最初に確認した六つの批判項目のうち、第四と第五の論点も、福沢の物語的論理に関わるものと見ることができる。第四で、西は次のように言う。福沢は青年の書生が官途を志すのは「名望を得たる士君子の風に倣う」(79)からだというが、それは違う。学資がないから、生活に追われているから、あるいは洋学の指導者が欲しいからといった理由があるのだ。これは一応は「原因推定」の錯誤に対する批判である。しかしそうだろうか。では「学者職分論」で該当箇所を確認してみよう。福沢は洋学者のほとんどが官途を目指し、私立するものが少ないことを指摘し、世間が皆洋学者を模倣していると述べる。そして問題の箇所が続く。

> 青年の書生、わずかに数巻の書を読めば、すなわち官途に志し、有志の町人、わずかに数百の元金あれば、すなわち官の名を仮りて商売を行わんとし、学校も官許なり、説教も官許なり、牧牛も官許、養蚕も官許、およそ民間の事業、十に七、八は官の関せざるものなし。ここをもって、世の人心ますますその風に靡き、官を慕い官を頼み、官を恐れ官に諂い、毫も独立の丹心を発露する者なくして、その醜体、見るに忍びざることなり。(90)

「対句」と「列挙」と「繰り返し」が巧みに組み合わされ、次第にテンポを上げつつ畳みかけていくリズムが感じられる。読み手をグイグイと引っ張っていく文章である。まさに声に出して読みたくなる名文である。注意しなくてはならないのは、ここでディスクールの運動を発動しているのが「論理」ではないということだ。そうではなく類似性によって喚起される観念の連鎖と数学的規則性に基づいて計算された音韻効果である。文章のめまぐるしい展開に、通常の読者は流されてしまうだろう。西のように「書生が官途に志す真の理由はなにか」などという疑問を挟む余裕を持つ読者はほとんどいないだろう。西は疾走する福沢に論理のブレーキをかけようとしているように思われる。福沢の名調子で支配的なのは、「論理学的論理」ではない。むしろ言葉の自律的な論理、平井一弘が言う「日本的なレトリック」なのである。

6．結論にかえて：啓蒙とことば

ここまで、福沢諭吉的スピード感に魅力を感じつつも、西周的論理展開を尊重しながら、西の指摘が、現代の研究者の分析を先取りするものであることを確認した。そして同時に西がおこなった福沢的ディスクール分析の妥当性を確認してきた。その結果、次の二つの特徴を確認した。

1．参照関係を明示することに消極的である。
2．西洋的論証レトリックよりも、日本の伝統的レトリックが支配的である。

次に残された作業は、福沢のディスクールの背後にどのような啓蒙戦略があり、さらにその背後にいかなるイデオロギーがあるのかを確認することかもしれない。だがそれは福沢研究者に委ねよう。我々は分析主体である西周に立ち返って、次のように問おう。なぜ西にとって福沢のディスクール批評をすることが必要だったのか。

それに答えるためには、西の「啓蒙」における「ことば」の重要性を理解しなければならない。ところで「啓蒙」と「ことば」はどこで繋がっているかといえば、いうまでもなく論理学である。ここで「学者職分論論争」からまもない明治七年七月に西周が発表した『致知啓蒙』の「自序」を見てみよう。

> 余嘗て欧羅巴に遊び、頗る其の事情を悉す。観る所の凡百事物、之を目するに二字を以てす。曰く浩大。都邑府城の若き、道路橋梁の若き、宮殿楼閣の若き、廨暑・庠校・祠宇・教堂の若き、幼孤・唖盲・癲狂・疾病の諸院の若き、金銀硝磁を分析・鋳鍛する諸工廠の若き、考古・博物・禽獣・草木の諸館園の若き、銃砲船艦・海陸諸軍の兵具戦器の若き、汽車・電線・驛遞・銀行・互市諸場の若き、凡そ以て目に触れ、耳に入るもの、皆愕然驚嘆せざるは莫し。退いて諸を書史に考へ、諸を学術に徴するに及んでは、惘然自失惛然自惑たり。蓋し其の説の精緻にして、其の論の詳確なること、繭絲牛毛も啻ならず、自ら心力以て包括する能はず、智力以て剖拆能はざるもの有るを覚ゆ。乃ち又之を目するに二字を以てす。曰く精微。夫れ此二義は萬緒千端にして各々其の方を同じうせず。浩大は外に努めて其の極將に無際に至らんとし、精微は内に努めて其の極將に無間に入らんとす。故に此に従事して手滑する処あらば、生疎偏小の病を免れず。誠に難きと為るなり。今両得有りて之を兼ねんか、魚と熊掌とを獲たりと謂つ可し。然れども之を獲るや、必ず道あり。朝夕の能く致す所に非ざるなり。既に致知の術に依って、本末相依、因果相応の故を求め、講究之れ久しうし、思惟之れ熟して、一旦以て心に会する有りて曰く、精微は本なり因なり、浩大は末なり果なり、能く其の精微を尽くす、故に能く其の浩大を致すと。独り世の耳に開化を

学び口に文明を唱ふるの徒、能く其の浩大を模して而して其の精微を遺すを怪しむ。是を思惟の始に審にし、諸を論弁の際に詳にするに非ざれば、即ち能はざるなり。凡そ学術の論、公会の議、状師の訴、判官の断、苟も此に軌範せざれば、将室を路傍に作るに近し。亦何ぞ基礎の固く、累架層構傾覆の患無きを保せんや。此の書今刊して世に公にす。聊か以て大匠利器の用に供せんと欲す。固より浮噪速成を望むる者とは語り難し[10]。

西は次のように言う。ヨーロッパの文明は「観る所の凡百事物」、すなわち「目に触れ、耳に入るもの」すべては「浩大」の様相を呈している。しかしそうした現象を生み出した「学術」に目を移せば、そこにはもう一つのヨーロッパ原理が君臨している。それは「精微」である。つまり文明には「浩大」と「精微」という相反する二つの原理があるのだ、と。

ところで、上の引用で、ヨーロッパの学問に接すると「蓋し其の説の精微にして、其の論の詳確なること、繭絲牛毛も啻ならず、自ら心力以て包括する能はず、智力以て剖拆能はざるもの有るを覚ゆ」と述べた一文は、西がライデン大学で社会諸科学を体系的に学んだときの驚きの表現だと想像してはいけないだろうか。もしそうであるならば、これは西周におけるウェスタンインパクトがどこにあったかを指し示すことばであるだろう。西周にとって西洋の根本原理は「精微な論理」なのである。そしてヨーロッパ文明の「浩大」、すなわち成果だけを取り入れようとする行為は批判されなくてはならない。「精微」という原理を導入しないかぎり、それは導入ではなく模倣でしかないからである。

さらに西は、「精微」が学問の原理であるだけでなく、人間の社会的活動の原理でもあると続ける。すなわち「精微」は「思惟」と「論弁」の基礎なのである。致知学的な精微は、「学術の論、公会の議、状師の訴、判官の断」といった文明開化の装置や制度を機能させる原理なのである。つまり、論理的精微とは論理学という一専門分野の学問領域の専有物ではない。それはヨーロッパ文明の本質であり、近代社会を機能させる原理、人間交際と学術の共通言語なのである。

ここで福沢諭吉の言語観と西周の言語観の共通性と差異を確認することができよう。両者ともヨーロッパ文明の精神を導入するためには、コミュニカティブな社会を確立することが必要だと考える。これが共通性である。しかし真のコミュニケーションを実現させるためには何が必要かという点について、両者の考えは異なる。西は西洋的な論理的精微を重要視する。他方福沢諭吉は日本的物語論理による「解りやすさ」を重要視する。この言語コミュニケーション観の違いは、両者の文体上の相違として現象している。そのことを西の「非学者職分論」は明らかにしたと言えるだろう。しかし他方、言語観の相違は両者の啓蒙観、啓蒙戦略の差に根ざすものである。では西周と福沢諭吉の「啓蒙」の違いはどこにあるのか。

これは簡単に答えることのできない問題である。安易な回答を出すことは避けたい。し

かし、「ことば」の問題に限定して推測すれば次のようなことが言えるのではないか。福沢的ディスクールの対象は「人民」である。それに対して西の対象はまず政治家であり、学者である、と。とはいえ急いで付け加えなくてはならないが、福沢の「人民」とは、慶應義塾で学ぶエリート集団であった。また、西が政治家と学者を対象に想定していたからと言って、権力の方を向いていたと結論することはできない。というのも、明治七年当時の政治家と学者は、ややもすれば復古主義に回帰しかねない存在であった。言い換えれば説得し、論破しなくてはならない潜在的敵でもあったのだ。官に身を置いていた西は、政府内部にいまだ攘夷思想、復古主義、国学的伝統、儒学的伝統の隠然たる力を感じていたからである。西にとっていまだ啓蒙は戦いであった。

注

1）西周「非学者職分論」および福沢諭吉「学者職分論」の引用はともに山室信一・中野目徹校注『明六雑誌（上）』（岩波文庫、1999年）の現代表記版から行った。参照箇所は、引用後の（　）内にそのページ数を記した。

2）伊藤正雄「解説」『学問のすゝめ』（講談社学術文庫、2006年、284－285頁。）

3）小林嘉宏「明六社における学術論争の意味――「学者職分論争」を手がかりとして」（日本思想史懇話会編『日本思想史』NO. 26、1986年、29－47頁）

4）同上、41頁。

5）西周「洋字を以て国語を書するの論」山室信一・中野目徹校注『明六雑誌（上）』、30頁。

6）松沢弘陽『近代日本の形成と西洋経験』（岩波書店、1993年、307頁）

7）坂野潤治『福沢諭吉選集』第七巻解題（岩波書店、1981年、319頁）

8）平石直昭は、「一時の術策」を次のように説明する。「「一時の術策」として福沢の念頭にあったのは、かつて幕末時代に彼が主張した「大君のモナルキ」のような立場、ロシアをモデルにするような「文明開化の特権」策と考えてよいであろう」（平石直昭「福沢諭吉の戦略構想」東京大学社会科学研究所紀要「社会科学研究」第51巻第１号、1999年、86頁）。ここで平石は福沢の文脈の論理をたぐって推論している。だが論理的推測に依拠するだけでは、「誰」の「どのような策か」という質問に答えることはできない。やはり「参照不可能性」の壁は厚いと言わなければならない。

9）平井一弘『福沢諭吉のレトリックと「議論」論』（青磁書房、2000年、16－17頁）

10）西周『致知啓蒙』「自序」の原文は漢文である。引用は三枝博音偏『西洋哲学全書』第六巻（第一書房、1937年、22－23頁）の和訳を利用した。

キーワード　西周　福沢諭吉　学者職分論　明六社　明六雑誌

（WATANABE Nozomi）